



一ふみ十年

高原バスはようやく室堂むろどうに着いた。室堂は、海拔二五〇〇メートル、立山直下たてやまに広がるよう・岩の台地で、高山植物におおわれた草原帯である。目を上げると台地のはしから急にせり上がった三〇〇〇メートル級の立山たてやまのみねみねが台地を見下ろしている。白茶けた岩はだと、緑のしま模様もように見えるはい松、そして白い残雪が光を受けてまぶしい。バスから降りた人々のざわめきと対照的に、山は静まりかえっている。台地のはしの谷間にうごめいていたガスが、あっという間に広がって、あたり一面にたちこめる。山も人もこいガスの中に消えてしまう。しばらくしてガスが流れ、人の姿が現れ、台地の緑が広がり、山が姿を見せ始める。

勇は初めて間近に見た立山たてやまの美しさに、すっかりよってしまった。母と二人で、遊歩道のかたわらの草むらにこしを下ろして、無言で山をあおいでいた。

「もし、もし。」

見ると、若草色わかぐさの制服姿すくたの人が笑顔えがを向けて立っている。

「すみませんが、そこにこしを下ろさないでください。あなた方のこしの下は全部高山植物なんです。ほら、そのクリーム色の花はチングルマという高山植物です。」

勇たちはあわてて遊歩道にもどった。そのあとに、しばふのような草が折れ曲がっていて、その中にクリーム色の花をつけたチングルマも数本あった。



「高山植物を大切にしないさい。」

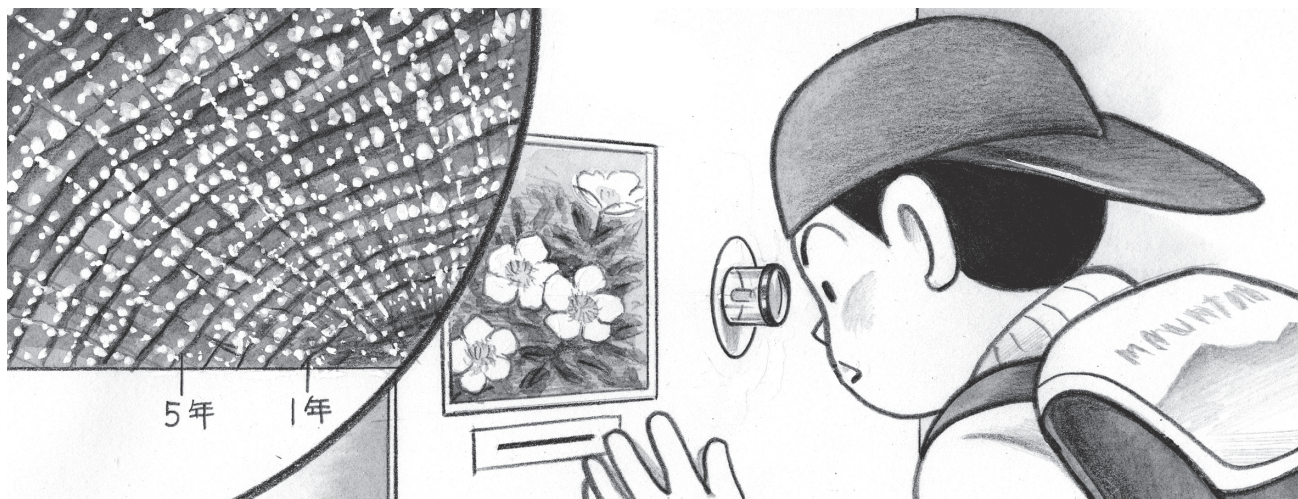
勇が家を出るとき、父によく聞かされていたし、バスの中でも注意されたことだった。けれども、ここに立つと、山の姿があまりにも大きく、美しかったので、足元の小さなものは、すっかり忘れてしまったのであった。勇は自分のほおがだんだん熱くなっていくのを感じていた。

この人は自然解説員で、松井さんといった。松井さんといっしょに勇はあらためて、周囲を見わたした。台地は今、チングルマの花ざかりであった。緑の中にクリーム色の花がいっぱい広がって風にゆれている。よく見ると、その中に小さい星形の真っ白な花が、あちちの一つ、こっちの一つと、ひっそりさいている。勇はその純白の色と形も、たまらなく好きになってきた。聞くと、イワイチョウの花だそうだ。勇は今、大きくて男性的な美しさの山のあちこちに、だまってさいている小さな高山植物の美しさに感動した。

そんな勇の様子を見ていた松井さんは、

「よいところへ案内しましょう。」

と言って、先に立って歩きだした。しばらくして着いたのは、「立山自然保護センター」というところであった。その展示室の一角に、天じょうから白い掲示板が何枚もつり下げられていた。その掲示板には、高山帯に生えている樹木の年輪の大きな写真がはってあった。



「さあ、これをのぞいてごらん。」

松井さんはその中の一枚を指差した。ちょうど勇の目の高さほどのところに、円がえがかれていて、その中心に虫めがねが固定されている。目を近づけると、レンズを通して年輪が見える。勇は虫めがねから目をはなして、横の方からそれをのぞいてみた。そこに、マツチ棒より少し太めの植物のくきが二センチメートルほどの長さに切られて立っていた。

円の横に、チングルマの花の写真がはってある。

「あ、これはチングルマのくきですか。チングルマに年輪があるのですか。」

勇は思わず大きな声をあげた。

（チングルマに年輪がある。チングルマは木なのだろうか。）

（だって、チングルマは草と同じようにくきをしているではないか。）

「これは本当にチングルマですか。」

「そうです。高山植物には木の仲間と、多年草の二種類があるんです。ところで、その年輪を数えてごらん下さい。」

松井さんに言われて、勇は急いで虫めがねに目をおしつけるようにして、年輪を数えた。十以上は確かにある。それ以上はぎっしりつまり過ぎていて数えられない。

「ああ。」

勇は、チングルマに年輪があると分かったときよりも、もっとおどろいた。

「たったマツチ棒の太さになるのに、十年以上も。ぼくが生まれる前からだ。」

せいぜい十センチメートル余りの高さで、クリーム色の花を太陽に向けて、風にゆ



られていたチングルマの様子が、勇の目にうかんできた。その中に、勇たちがこしを下ろしてしまったチングルマもあったのだ。勇の胸がきゅうっと痛んだ。

「昔から立山では、『一ふみ十年』という言葉があるのです。」

松井さんは静かに勇に語りかけた。

「それは『高山植物をふみつけてしまうと、元のようにするには十年以上もかかるよ、みんな気を付けよう。』という合い言葉だったのです。バスが通っていない昔に山へ登ることは、大変つらいことだったのです。自分の足だけがたよりですからね。それでも山へ登るといのは、山が好きだからなのです。山が好きな仲間はこちらを合い言葉にして、みんなで山の自然を守ってきたのですね。」

今はバスでだれでも来ることができます。たくさんの人にこの大自然を味わってもらいたいと思います。しかし、中には平気で花を折ったり、ふみつけたりする人もいます。そんな人を見ると悲しくなります。そんな人は何のために山へ来たのかと思いますよ。」

勇は、その言葉一つ一つを胸にきざみつけた。

(文 吉藤一郎／クリエイティブ・ノア)

？ 考えよう

① 勇が「ああ。」と言ったとき、どんな気持ちだったのでしょうか。

② 勇の胸がきゅうっと痛んだのはどうしてでしょう。